

## 確かな質保証を実現するための教員養成：モデルカリキュラムと適格判定の基準 佐藤勝幸

### 序論

第二次世界大戦後、日本の教員養成の体制は大きく変化した。1949年、師範学校は大学へ移行し、同時に開放性がとられ、文部科学省の課程認定を受ければ、私学の大学でも教員養成が行われるようになった。

国立大学の教員養成による教員就職率は2000年において全体で39%であった。校種別で見ると、小学校では60%、中学校では38%、高等学校では15%、特別支援学校では44%であった。このような状況から考えると、国立大学の教員養成はその役割を果たしているとは言いがたい。さらに、大学を卒業したばかりの教員は実践的な指導力が不足しているという報告がある。実際によい授業を行えていないケースもあると思われる。2001年、中央教育審議会は大学の教員養成のカリキュラムや授業内容の見直しの必要性を示唆している。特に国立大学においては、この課題に対して対策が求められていると考えるべきである。教員養成における課題として、2つの課題が指摘されている。それは①大学教員間での十分なコンセンサスの欠如と②アカデミズムとプロフェッショナリズムの対立である。アカデミズムの考えでは、教員は深くある分野での学問ができることが大切であり、プロフェッショナリズムの考えでは、教員となるものは教員としての知識や技術をもつことが重要であるとしている。さらに教員養成の課題として、教員養成のためのカリキュラムや大学教員のコンセンサスを束ねる柱立てがないことも指摘されている（横須賀,2006）。さらに大学教員の意識には、大学教員は講義さえすれば、学生は学んだことを自分で統合できるというものや、大学教員はただ講義をすればよく、後は関係ないとするものなどさまざまである。このような課題が今も残されている。我々は大学における教員養成を改良するために、これらの課題を解決しなければならない。

大学での理科教員養成において例を挙げてみると、理学部出身の大学教員の多くは出身学部と同じような講義を行い、教育学部出身の大学教員は理科教育に関わる講義を行うだけで、これらに何ら連携も関連もみられないことがよくある。学生はこれらの講義を受けるが、自分だけで学んだことを統合できないため、学校現場に必要な知識や技能を十分得ることができないことになる。このことが上述の課題につながっていると思われる。

いくつかの大学では、カリキュラムの改良に着手していて、教員養成のシステムを改良している。我々、鳴門教育大学においては、コア・カリキュラムと授業実践力評価スタンダードを作成している。さらに現在、国立大学における教員養成のためのモデルカリキュラムの開発に着手している。

### コア・カリキュラム

図1は本学のコア・カリキュラムを表している。中核に教育実践学を据え、教養科目、教職科目、教科をコアと連携させながら配置している。コア（教育実践学の部分）は教科教育実践と教育実践の2つから成り立っている。教科教育実践はさらにコアⅠとコアⅡから成り立っている。コアⅠでは、学生は子どもの理解、学級経営、生徒指導、教員の使命等について学び、コアⅡでは、教科書の内容に沿って子どもの理解や発達を学んでいる。後者では、教科教育の大学教員、教科専門の大学教員、附属や公立学校等の教員が協働し

合いながら講義を行っている。これらは他の大学ではみられないスタイルである。すべての教科は互いに連携をとりながら行われている。このカリキュラムの作成は2002年に始まり、2005年から実施されている。

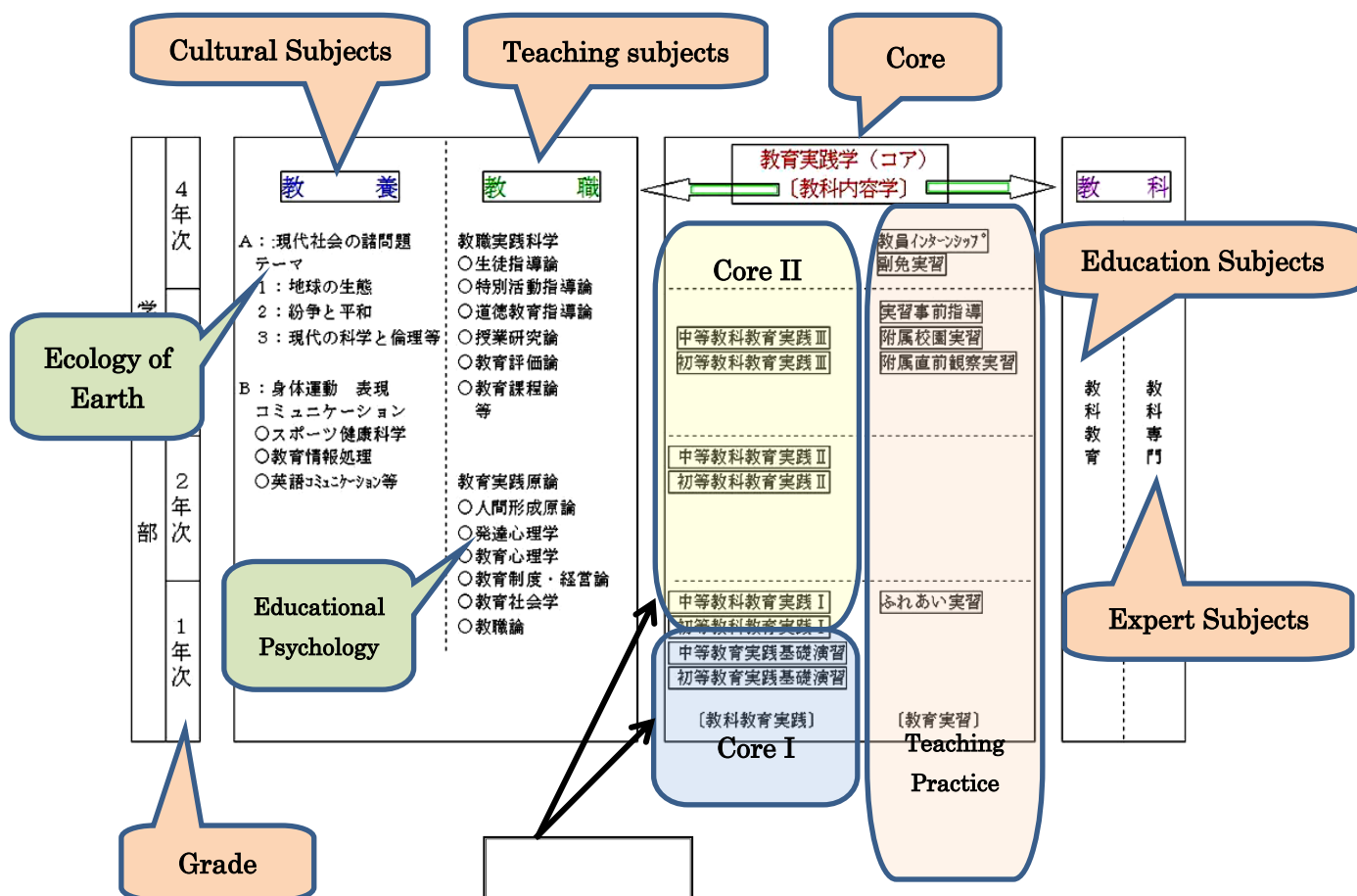


図1 鳴門教育大学のコア・カリキュラム

授業実践力評価スタンダード

教育実践力として、授業実践力、対人関係能力や教師の使命感などが挙げられる。我々は授業実践力についての評価スタンダードを開発した(図2)。スタンダードは3つのステージでの達成目標で設定されている。その3つのステージとは、教育実習前、学部卒業時、教員10年目の3つである。授業実践力は3つの能力：授業構想力、授業展開力、授業評価力から成り立っている。この評価スタンダードは現在試行段階にある。

Point \ Stage	Stage 1	Stage 2	Stage 3
<b>A. Lesson planning ability</b>			
<b>1. Understanding of Learner</b>			
1) Actual condition of Learner	I grasp an attitude toward learning of the learner as the whole class.	I teach students grasping the actual situation (learning will, interest, knowledge and understanding degrees) of the individual learner.	
2) Rulemaking of Learning			
<b>2. Objective Setting</b>			
<b>3. Lesson Structure</b>			
1) Configuration of the learning content			
2) Configuration and Selection of Teaching Materials			

Abbreviation

図2 授業実践力評価スタンダード

理科コースの授業構想力の評価スタンダードを示している。

学部卒業生に対するコア・カリキュラムによる教育実践力育成に関するアンケート

教育実践力育成に対するコア・カリキュラムの有効性を調べるため、コア・カリキュラム以前と以後の卒業生を対象にアンケート調査を行った。アンケートの内容は以下の通りである。

1. 教育内容の量・質に関して (2問)
2. 実習・演習のレベルに関して (3問)
3. 教育実習について (3問)
4. コア科目について (1問)
5. 大学で学んだ成果について (16問)

答えはマークシート方式で、5段階から選択するものである。「最もそう思う」が5で、「思わない」を1として設定している。

2つ目のアンケート調査として、徳島県に教員として就職している卒業生を対象にコア・カリキュラムの有効性を調べた。アンケートの内容は上述と同じであった。最後に徳

島県に教員として就職している卒業生とその職場の校長先生に対してコア・カリキュラムの有効性をインタビューにて調査した。

コア・カリキュラム以前と以後の卒業生を対象にアンケート調査から、「講義内容の理解」、「実習・演習の理解」、「リーダシップ」や「管理能力」の項目に対する評価がコア・カリキュラム開始後の卒業生において有意に高かった。この傾向は2つ目のアンケート調査でも確かめられた。しかし、「学級経営能力」や「生徒指導能力」の項目に対する評価は有意に低かった。本学のカリキュラムを改良する必要があると思われる。インタビュー調査において、卒業生は「教育内容の量や質」、「教育実習」や「コア科目」の項目に対して高い評価を示した。努めている学校の校長先生は「コア科目」に高い評価を与えていた。これらから、教育実践力に関するコア科目の有効性が明らかとなっている。そこでわれわれはこのコア・カリキュラムを基に教員養成のためのモデルカリキュラムを作成しようと試みている。

#### 教員養成のためのモデルカリキュラム

卒業生の質保証のために、本学のコア・カリキュラムを基に教員養成のためのモデルカリキュラムの作成している。現在、作成したモデルカリキュラムをより汎用性のあるものにするよう検討している。ここでは、このモデルカリキュラムの概要を報告する。

モデルカリキュラムは2部構成で、カリキュラムマップとガイドラインからなる。

#### カリキュラムマップ

大学の授業科目と教員として必要な資質・能力との関係を明らかにするために、カリキュラムマップを考案した(図3)。マップの縦軸に授業科目をとり、横軸に教員として必要な資質・能力をとった。1つの授業科目がいくつかの資質・能力と強く関わる場合、その交わるところにその授業科目の到達目標を記述している。このようにして記述されたカリキュラムマップをみると、各授業科目と教員として必要な資質・能力との関係を理解できるだけでなく、大学のカリキュラムの構造を理解できる。このマップは他にいくつかの機能がある。もしこのマップに他の大学の授業科目を当てはめると、教員として必要な資質・能力に対する授業科目のバランスを知ることができるので、このマップはカリキュラムの再構築に役立つ。また、このマップにより学生は教員として必要な資質・能力を知るだけでなく、その資質・能力と授業科目との関連を知ることができる。したがって、自分にとって欠けている資質・能力を得るために授業科目を選択することができることになる。

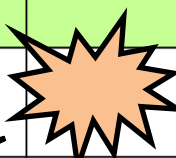
教員として必要な資質・能力とは何だろうか。私たちは教員として必要な資質・能力として以下のことを提案している。;教育人間力、協働力、生徒指導力、授業力、省察力。省察力を除いて、それら資質・能力はさらに下位の概念に分けられる。

#### 教員として必要な資質・能力の関係

教員として必要な資質・能力は5つのカテゴリーに分けられている。これらの関係を図4に示している。学生は小さいけれども省察力を元々持っていると考えられる。残り4つの資質・能力はそれらに関わる講義を通じて育成される。この4つの資質・能力が育成されると省察力がより大きく育成される。これによりさらに学習への意欲や動機が高まり、さらに4つの資質・能力がより大きく育成される。このサイクルが繰り返されることで教

員としての資質・能力が次第に育成され、卒業時点までにこれらの資質・能力をある水準以上に育成できると考えられる。もちろん、これら資質・能力は教員となってからも育成されるものである。

The qualities and abilities required for teachers	
<b><u>Literacy of Teacher</u></b>	
①Sense of duty, ②Sense of ethics, ③Enthusiasm for education,	
④The spirit of inquiry, ⑤Culture	
<b><u>Cooperation</u></b>	
①Interpersonal skills, ②Harmony, ③Sociability	
<b><u>Student Leadership</u></b>	
①Fundamental attitude, ②Personal leadership, ③Group leadership	
<b><u>Teaching Force</u></b>	
①Understanding of subject content, ②Conceptual ability,	
③Deployment, ④Evaluation	
<b><u>Reflection Power</u></b>	

Subject	Literacy of Teacher					Work in Cooperation
	Sense of duty	Sense of ethics	Enthusiasm for education	The spirit of inquiry	Culture	Interpersonal skills
Japanese constitution						

**【FINAL GOAL】**  
Constitutional human rights are .....

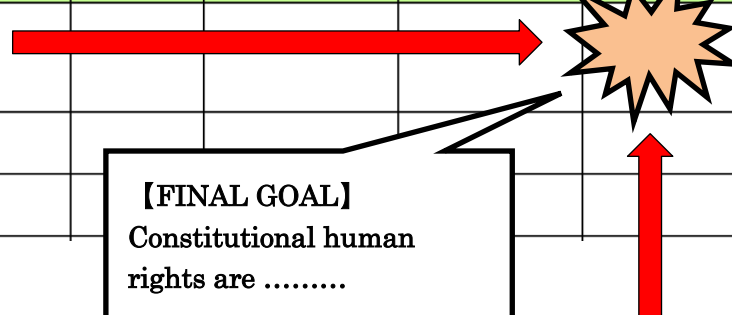


図3 カリキュラムマップの一部

「日本国憲法」は 教育人間力の教養と密接に関連している。科目と資質・能力が交わる場所に、「日本国憲法」のその資質・能力に関する目標が記述されている。

A: Literacy of Teacher  
 B: Cooperation  
 C: Student Leadership  
 D: Teaching Force  
 E: Reflection Power

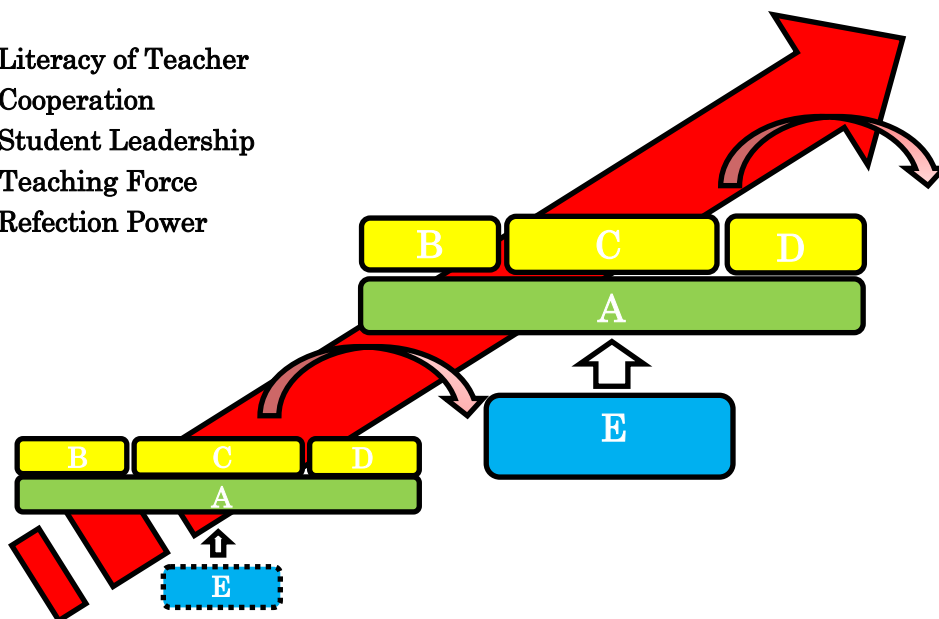


図4 教員としての資質・能力における関係

#### ガイドライン

各科目の目標と作業課題を学生に示すために、ガイドラインを作成した(図5)。目標はカリキュラムマップに記述されているものと同じである。カリキュラムマップで複数の教員として必要な資質・能力と深く関わっていれば、目標はそれぞれの資質・能力ごとに記述されている。この場合ガイドラインにも複数の目標が記載されている。作業課題とはそれら目標を達成するために学生に求める作業内容である。この課題の達成度に応じて大学教員は学生を評価している。

#### 科目と教員としての資質・能力との関係でみられる特徴

本学の授業科目をカリキュラムマップに当てはめると、本学のカリキュラムの特徴を知ることができる。教養科目は教育人間力の探究心や教養と深く関わっていることが分かる。同様に、コア科目は授業力と、教育実習はすべての資質・能力と関わり、また教科教育は授業力と、教科専門は授業力のうち、「教科内容の理解」と深く関わっている。

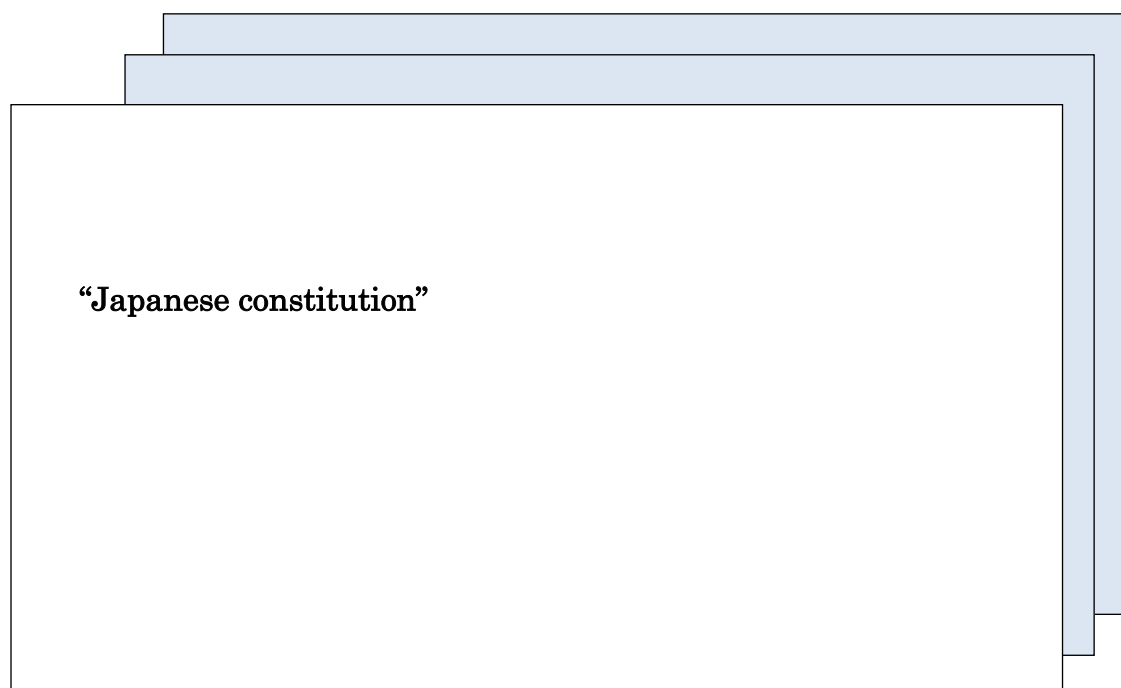


図5 ガイドラインの一例

「日本国憲法」について記述されている。

#### 教育実践力育成に関するカリキュラムの適格判定

カリキュラムや科目を設定しても、必ずしも学生が教員としての資質・能力を習得できるとは限らない。学生が本当にそれら資質・能力を習得しているかどうかを検証する必要がある。今、われわれは判定する基準を作成している。評価する手段として、学生が各授業で行ったことやボランティア活動などを記録したキャリアノートを活用しようとしている。一方、コアⅡの科目において、教育実践力を評価するための判定基準を作ろうとしている。コアⅡは教員として必要な資質・能力のすべてと関わる教科であると考えられるので、教育実践力を検証するのに適した授業科目であると思われる。